

イネ科の外来品を友人の生花のなかから押収してきた。一見ヌカキビに似ているが枝が細く、小穂が細く、はなはだきれいなもので、これを同教室の李氏と許氏がともに *Panicum capillare* L. と同定されたが、その同定には異存はなく余りに正確であったが、和名がないのでキヌイトヌカキビとした。英語では Old witch grass というようだが、それにあやかれば山姥のなんとかいうことになるが、キノコにヤマウバノカミノケというのがあり、また山姥という観念はこのせん細な草にふさわしくないような気もするので、一応こんな新名を提唱した。和名には先占権の規定もないから、もっとよい名があったら従うことにする。この草は北米のものであるが、生花用の切花として利用されているところを見ると、近年輸入されて、どこかで栽培されているものと思われる。

シナダレスズメガヤ (北村氏新名) 近年土砂のくずれを防ぐ目的で各地で植えはじめたものに *Eragrostis curvula* (Schrad.) Nees. 英名 Weeping love grass がある。これは、比叡山の参道にうえられて名物になり、同山に行かれた人はパスガールの情緒ゆたかな説明をきかれたことであろう。もともと、アフリカのものだというが現在北米では利用しているので、わが国には北米からきたものであろう。この草に、北村四郎教授は京都新聞社発行比叡山 (1961) の第 50 頁に比叡山の植物という項を分担され、そこでタレスズメガヤと命名されたが、私が頂いた別刷には、シナダレスズメガヤと肉筆で訂正してあるから、これを命名者の最終意志の表現としてそれに従うことにする。実はこの草の先行和名としては大井氏が浅井康宏氏の命名として北陸の植物 8 巻 (1960) p. 98 でセイタカスズメガヤという名を公表されてはいるが、私には北村氏の命名の方が名としては、そのものズバリであるから、それによることにした。しかし、両方の実物を見ていっているのではない。いづれにしても学名の場合の規定によらなくともよからう。それはそれとして、東京では近頃この穂をアルミニウム液に浸して銀鍍金したものが、花屋の店頭で現れだした。まことに奇妙な趣味が流行し出したものである。しるして、後の世の人の参考に資する次第である。もっとも、同じようなことが、いろいろなものにも行われ *Asparagus virgatus* Baker を同じように処理したものを店頭で見かける。

(東邦大学)

Summary *Verbesina occidentalis* (L.) Walt., *Pycnanthemum flexuosum* (Walt.) B.S.P., *Panicum capillare* L. and *Eragrostis curvula* (Schrad.) Nees are recorded as new aliens.

□ Glowes, F.A.L.: **Apical meristems**. Blackwell Scientific Publications, Ltd. Oxford (1961), pp. 217 pls. 32 近頃とくに注目されている基端及び根端の分裂組織の知識を両者に共通する面に重点をおいてまとめたもの。分裂組織における分化、芽の形成、葉原基の位置決定の機構、手術による解析等の組織次元はもちろん、根の somatic polyploidy、核酸の問題にまで一応わたって便利な本であるので少々以前の出版だが紹介する。37s, 6d. 32 枚の写真も役立つ。

(前川文夫)